

「復興ワードマップ研究会」(第11回) 2019年10月4日

出席者：近藤誠司・宮本匠・石原凌河・大門大朗・立部知保里

<ことばをめぐる問題構造>

・ひとつひとつのことばをめぐる考現学の議論をランダムに続けていくと、ある意味で「発散」してしまう。それはそれで許容しながらも、この研究会の取り組みから「共通した問題構造」を抽出することによって、「復興」を多角的に見つめなおすことができるような道筋をつけていくことも必要である。抽出したコンセプトに“フラグを立てる”ことによって、議論の土台をつくり、または、議論の活性化をうながす導火線・動力源をつくる。

・ただし、一方的に、巻き起こっていることの共通事項を「問題構造」ということばで表現すると、そこには語弊がある。それぞれのワードには、良い面・悪い面があるし、もともとベターメントを企図して（善意で）立ち現れたはず。功と罪と、そしてその間のステータス（形骸化していること、プラスチックワードになってしまっていること）にも、かなりグラデーションがある。単色カラーのフラグではなくて、「こういう視点の功もあるし、こういう視点の罪もある」ということを、バランスを保ちながら打ち出していなければ、**ことばのアクションリサーチ**としても共感は得られないだろう。視野を広げ、そもそも視座が多様にあること自体を認識して、検討を重ねていく。ただしやはり、実践を見据えた議論であることに違いはないので、フックをたくさんつけて、この分野の活性化を促していく。

・分科会の先出しをしておくと、「**パターナリズム**」、「**普遍化**」、「**マネジメント**」という3つのフラグを立てて、複数のことば群を点検していく。

・例えば、「**要配慮者**」ということばをめぐる動きに関しても、「**パターナリズム**」という観点や、「**普遍化**」、「**マネジメント**」という観点から点検していく。

・「**パターナリズム**」の観点では、「弱いひとたちを守ってあげるべきだよな」という善意に基づいて、為政者側（先導する側）が生み出したかまえが、ことばとしてはどのように結晶して、それがどのように機能しているかを見ていくと、状況が確認しやすい。**父権主義**的なかまえは、社会のすみずみまで伝染して、たとえば**自主防災組織**においても「**要配慮者**」ということばを使いまわしている人が増えてきている。そのなかには「守ってやるんだから、わたしの言うことを聴きなさい」という、ミニチュアな権力構造が拡大再生産されているような場面さえある。

・さらに現実の問題としては、そういうことば群が普及している割には、実際の犠牲者数が減らないとか、要配慮者名簿を作っておきながら安否確認はしていないとか、「**パターナリズム**」の顔つきだけが間歇的に表に出てきて、内実は伴っていないという

状況もある。

・「**パターナリズム**」の問題の典型を要配慮者名簿に即して言えば、リストに名を連ねた時点で「OK (いざとなったら助けてもらえる)」とってしまう人を生み出しているという点が、いちばんの逆効果だといえる。本当は、一人ひとりがなすべきこと・なせることを引き出しながらみんなで頑張りぬくことが一つの理想形だが、「**パターナリズム**」が拡大していくと、「守ってあげる・守ってもらう」という古典的な構図を単に呼び戻したかたちになってしまう。

・配慮すべき人とは一体誰のことを指しているのか、具体的な手段でどのようにしたらいいのかという点が曖昧模糊としていて、結局は捨て置かれてしまっている。**父権主義**は、パワーが伴わない時代にあっては、そでにして“底抜け”している。**責任**とか、**プロフェッショナリズム**とか、そうしたことをめぐるドライブを見ていくと、「**配慮**」の何たるかをもっと考察することができるかもしれない。

・「**コミュニティ・ビジネス**／**ソーシャル・ビジネス**」ということばをめぐる現象は、包摂することによって対象が広がり、個々の対象に対する思いが希釈され、希薄化していく点に見いだされる。**コミュニティ**のときはベースがしっかりしていたが、**ソーシャル**の次元になると、**ユニバーサリズム**というか、普遍的にみんなでやりましょうということになって、一般化・抽象化されていく。

・「これも**コミュニティ・ビジネス**だし」、「これも**ソーシャル・ビジネス**ですよ」ということも起こっていると思われるし、他のことばをめぐるでも、同じような事態が起きていると思う。「これも**ボランティア**ですよ」、「**要配慮者**ってこんな人もいますよね」など。

・包摂が良いドライブになるときと、そうはならないとき。包摂が排除を印象付けるときと、そうはならないときがある。すべてを包摂しきったときに、結局その運動は何を得たことになるのか。

・いろんな企業活動が「**ソーシャル・ビジネス**」としてとらえられることでメリットが見いだされる局面もあるが、行き過ぎると金儲けのために「**ソーシャル・ビジネス**」を掲げてしまえばそれもよいということにもなりうる。結局、「**ソーシャル・ビジネス**」って何なんだっけ(そもそもソーシャルでないビジネスなんて原理的に存在するのだった)となる。いまこそ、「**社会**」と対置させなければならないコンセプトは？

・「**事前復興**」であれば、管理主義的なコントロール、「**復興中心主義**」的な観点から検討することができる。これを、ニュートラルにまとめると、**マネジメント**の視点。

・「**事前復興**」の「罪」の局面として、管理主義的なコントロールをあげつらうことは、無理筋なのかもしれない。管理主義的であるからこそブレイクスルー出来ることがある。「**事前復興**」は、まさにその領野を切り開き、多様なアクターを引き込んだことにベネフィットがあったと評価することができる。

・以前、この研究会で読んだ山中先生の「**集団主義**と**個人主義**」の議論をふまえると、

復興も防災も、集団主義的にマネジメントしていこうとする発想から始まっているので、そこにはスケールメリットがもちろんあるし、都市計画として全体的にやらないといけないこともあるので、そのオペレーションの意義は認めなければならない。一方で、個人主義の立場に立てば、個々の暮らしが捨象される危険もはらんでいるということは言えるかもしれない。補完的な観点を確保するためにも、カウンターとしての個人主義の視座を持っておく。しかしおそらく、個人主義の地平からこそ考えるべきだとする原理的・実践的な立場もあるので、この幅の両極を見据えながら議論を進める必要があるだろう。

- ・事前復興という名の下で、開発主義・成長主義的な考え方が入ってきたという点が問題ということか。事前に復興しようと言いながらも、描かれる絵が身の丈に合ったものになっておらず、イケイケになる。事前に復興しようとしたら（いまの時代であれば）ダウンサイジング、コンパクト化するはず。しかし、成長や発展こそ「功」ととらえている人もいるので、この点を「評価」することが難しい。結局、事前復興を唱えている人たちが、そこに自分自身の未来像を投影しあっているだけなのかもしれない。

- ・「福祉避難所」のコンセプト（フラグ）は、「要配慮者」にもかなり重なる。行政管理主義的にこのことばをめぐる事態を語ると、功罪とりまぜて分析ができそうである。そもそも避難所や避難者を公的にサポートするってどういうことなのか、ここから考えてみると、あやうい土台のうえで議論していることがわかる。「指定避難所」とか「自主避難」とか、日本社会の文脈で突出して使用されていることばたち。

- ・「被災写真」は、ひとつの概念というよりムーブメント。問題が見えてくるというよりは、カウンターが見えてくるかもしれない。かつては歴史的に重要だと思われるものだけが修復されていたのが、一人ひとりの日常を回復させるところにボランティアに手を差し伸べるムーブメントになっている。上記の肌触りの悪いコンセプト（フラグ群）の逆の側面を提示できるかもしれない。あるいは、被災写真の修復に行政が乗り出して「マネジメント」する「秩序化のドライブ」が見いだされるかもしれないし、もしくはすでに見いだされているのかもしれない。

- ・お焚きあげを決断した自治体は、遺失物法の影響というよりも、保管場所の確保ができないという理由でお焚きあげに踏み込んだ。しかし、「保管場所がない」とか「予算がない」という理由だと批判が大きいことが予想されるので、「遺失物法では6か月しか保管できないんですよ。むしろ数年間保管していたのは特例措置だったんですよ」という説明によって批判を回避しようとした。ある自治体では首長の判断で、ボランティア団体が被災写真を管理していいよ、となった。

- ・「レジリエンス」ということばは、なんでも盛り込めそうな箱になっている。
- ・台湾では「コミュニティ」という概念の中に人間と社会と自然が含まれていて、生態

系全体の「レジリエンス」を考えている。一方、最近日本では「グリーン・レジリエンス」ということばが生まれている。日本ではことばをあえて足している(増やしている)。ことばを「閉じる」ということはできないのだろうか。例えば台湾では、「**社区総体营造**」が後々「**社区营造**」になった。「社区」ということばの中に「総体」のニュアンスが含みこまれるようになったから。

- ・「**ボランティア元年**」は、**ボランティア** (という概念) が死んでいった始まりの年でもあるのではないか」という見方がある。ことばが生まれた途端、それをめぐる動きが活性化することもあるが、色あせていってしまうこともある。

- ・最近、大学によっては各プロジェクトが **SDGs** の何に該当するかを示さないといけない。**SDGs** が目指していること自体は良いと思うが、やり方が問題。数値目標を立てるのであれば、きちんと数えないといけないし。災害に関して言えば、一部損壊被害を受けてずっと困窮している家庭のブルーシートの数をかぞえている自治体がある一方で、まったく把握していない自治体もある。「数値がなければ問題がないことになる」という問題、数値で把握できなければチャレンジしないという問題。誰かが数値にしてくれるはずという問題。数値を扱えるのは「私たちであってあなたたちではない」という **パターンリスティックなマネジメント** の問題。

<フリーディスカッション：芽出し>

- ・「**復興イズム**」(**復興中心主義**) なるもの(「**復興**させてやろう」、「**復興**すべきだ)があるとして、その一方で、被災者の中には「**心の復興**なんてできやしない」と思っている人がいる。この「**復興**できない」というベクトルのことばが足りないのではないか。

- ・**防災**にも、「なんで**防災**しないんだ」と強調するほど閉塞感を生む場面がある。

- ・東日本大震災前後で、**防災**や**復興**に関してお金の流れがガラリと変わってきているように思う。身の丈に合わない量のお金が行きわたっている。

- ・アカデミック・コミュニティで出てくるロジックや理念とは別に、現場でつぶやかれることばの中に、力を持ったものがたくさんあるのではないか。そもそも「**復興**」ということばを普通に語る住民・市民・被災者・遺族は、限られるのではないか。好んで使っているのは、**マネジメント**する側の立場に立つことに“成功した”人だけ？

- ・**復興**ということばは使っていないけど、「これって**復興**したってことですよね」ということばはある。「朝、太陽が昇っているのを見ると幸せな気分になる」とか。そういうエピソード(言の葉)を、もっと強調していてもいいのではないか。それとは逆の「**復興**しない」、「**復興**したいけどできない」というような、**復興**の「手前」のことば(例えば『仮設声の写真集』)もある。これらを組み合わせて対比するのもいいかもしれない。

(了)